

■松尾芭蕉 俳人。俳諧を革新、蕉風といわれる独自の世界を生み出し、和歌と対等に引き上げた。
まつおばしょう
明滅亡・・・1644＝伊賀上野の城東、赤坂の農人町に生まれる。父与左衛門は伊賀阿拝郡柘植郷の人で上野に世帯をかまえた。本家は平家末流の土豪の一支族で無足人級の家柄。母は伊賀名張の人と伝える。

徳川家光没・1651＝ 7歳：

野郎歌舞伎始1653＝ 9歳：

・・・1656＝12歳：父が死去。
明暦の大火・1657＝13歳：

10代末から俳諧を始め、藤堂藩伊賀付士大将家の嫡男藤堂蟬吟の連衆として季吟系の貞門俳諧に遊ぶ。

松平信綱没・1662＝18歳：

・・・1664＝20歳： 最初の入集。

酒井忠清大老1666＝22歳： 蟬吟の死で出仕の望みを失い、俳諧師を志し、

・・・1671＝27歳：

東西海運確立1672＝28歳： *宗房判の三十番句合「貝おほひ」を携えて江戸に下った。
ただし、江戸に定住して活躍を始めたのは、
・・・1674＝30歳： 上京して北村季吟から「埋木」の伝授を受けた後と推定される。はじめ高野幽山の執筆となって磐城平藩主内藤風虎の江戸邸に出入りし、常連の信章(素堂)らを知り、風虎の招きで江戸に下った宗因と一座し、以後、宗因風の new 俳人として頭角をあらわした。

・・・1676＝32歳：素堂・松尾芭蕉「江戸両吟集」。
・・・1677＝33歳：この年から4年ほど小石川の水道工事の仕事に携わる。
藤十郎登場・1678＝34歳： 立机、日本橋小田原町で点業を始め、桃青と号して「十八番発句合」「桃青三百韻附両吟二百韻」、「桃青門弟独吟二十歌仙」、

徳川綱吉将軍1680＝36歳： *桃青判「田舎之句合」「常盤屋之句合」によって一門を確立したが、点業を廃止し、深川村に草庵をかまえて俳隠者となった。

天下一禁止・1681＝37歳： 宗因風の衰退するなかで「莊子」に心酔し、擬漢詩体の新風を率先して「俳諧次韻」を刊行。
好色一代男・1682＝38歳： 門人から贈られた芭蕉にちなんで号したが、大火で芭蕉庵を焼失。
八百屋お七・1683＝39歳： 再興したが、一所不住を志して行脚と庵住をくりかえしながら、 蕉風を樹立し、
堀田正俊暗殺1684＝40歳： 第1次行脚「野ざらし紀行」の旅に出る。名古屋連衆との出逢いで「冬の日」の成果を生み、
出世景清初演1685＝41歳： 戻る。以後の吟行に擬連歌体の俳言のない発句が目立つ。
・・・1686＝42歳： 「初懐紙評註」成る。
生類憐令始・1687＝43歳： 四季句集「あつめ句」は擬漢詩体、擬連歌体の表現をへて、和漢の伝統を混然とし、しかも“擬”意識を払拭した様式に到達しており、“古池や蛙飛びこむ水の音”もその一句。「かしま紀行」成る。第2次行脚「笈の小文」の旅に出る。
日本永代蔵・1688＝44歳： 「更科紀行」成るか。
・・・1689＝45歳： *「おくのほそ道」によって知られる奥羽加越の行脚へと続き、その体験をとおして、蕉風の思想と表現に開眼。その思索を深め、成果を世に問うために、伊賀、近江、京の各地になお2年の漂泊を続けた。

湯島聖堂・1690＝46歳： 「幻住庵記」や「嵯峨日記」を執筆し、近江連衆を後見して「ひさご」、
別子銅山始・1691＝47歳： 京連衆を後見して「猿蓑」を刊行したのは、その間のことである。そして江戸に帰った。
世間胸算用・1692＝48歳： 第3次芭蕉庵の新築が成り、新しい自覚に基づく「おくのほそ道」の執筆と、新風を期待できる新しい連衆の育成に専念、彼らを相手に“軽み”を唱導。「炭俵」や「続猿蓑」がそうした指導の下に成った。

芭蕉+師宣没 1694＝50歳： *その成果を上方に及ぼすため最後の行脚に出た。健康の衰えもあり、桃印の死以来、心労も重なった。また俳壇の大衆化に悼さす業俳(職業俳人)に背を向けて、孤高を持する芭蕉に追隨する者は蕉門でも多くなかった。俳風の変遷に遅れた古参の連衆の中には離反者も出、各地に軋轢も生じていた。“かるみ”の指導も伊賀で難渋した。そして、同門の不和をとりもつために訪れた大坂で病に倒れ、病中吟’旅に病んで夢は枯野をかけ廻る’を最後に、門人にみとられながら世を去った。